

在日映画〈血と骨〉に表われた暴力性研究

朴 東 鎬*

(e-mail: parkdongho@msn.com)

目 次

1. はじめに
 2. ナラティブ構造分析：社会的状況を中心に
 3. グレマスの記号学モデル分析：俊平を取り巻く三人の女性を中心に
 4. まとめ
-

1. はじめに

日本映画が、日本社会のマイノリティをどのように描いてきたか。朝鮮、台湾等の旧植民地に対し、また琉球民族、アイヌ民族に対し、どのような表象(representation)を集積し、いかにステレオタイプ認識をスクリーンに描いてきたか。これらに関して今まで多くの映画評論家は追究を避けてきたが、ポスト植民地主義の文化研究が活性化している現在、それは決して軽視できない重要な問題である。1)

特に、在日²⁾をテーマとした映画の製作は、一部の映画制作者によって多様なジャンルで描かれてきたが、それは戦前と戦後に、大別される特徴がある。戦前の日本映画は、朝鮮人を日本人が保護すべき対象として描いているが、戦後の映画ではこうした描写が一

* 慶尚大学 講師

1) 요모타 이누히코·강태웅 역(2011) 『일본영화의 레지컬한 의지』 소망출판 p.189

2) 本稿では、1948年韓国と北朝鮮の政府樹立以前に渡日(自律的であれ、強制的であれ)した朝鮮人を、在日朝鮮人と称する。従って、主人公・金俊平は1948年以前に日本に移住し、最後に北朝鮮国籍を選んだため、在日朝鮮人と表記する。また、在日韓国人と在日朝鮮人両方を称する時は「在日」と表記する。但し、引用文の場合、原文の表記をそのまま使う。

変する。それは、今まで朝鮮人を抑圧してきた贖罪意識が生まれたことや、左翼の映画制作者が自由に活動できるようになったためである。特に1970年代に入ると、在日の監督が直接メガホンを取り、民族的マイノリティとしての自画像を描き始めた。また、在日を描写するジャンルが多くなるにつれて、多様なイデオロギー的文脈が扱われた。1990年代以降には、ポジティブな在日映画が多数製作されたが、だからといってネガティブな要素を全面的に排除した訳ではない。言わば、人間本来の「陰」と「陽」を部分的に重複させて在日を事実的に描写したのである。

特に、2005年韓国でも封切りされた映画<血と骨>³⁾は在日朝鮮人の生涯を事実的に描写している作品である。しかし、日本では在日朝鮮人の歴史的な物語というより、「主人公・金俊平（キム・ジュンピョン、以下俊平）の姿から人間の「業」>が見事に描き出されている」という評、「在日朝鮮人の物語にとどまらない圧倒的なく人間像>を描ききった作品」という評、「一人の並外れた男と家族の物語で、在日朝鮮人の歴史ではない。むしろ父と息子の葛藤を描くことで、物語としての普遍性を獲得している」などと評価されている。⁴⁾つまり、この映画を戦後日本社会が敢えて目をそらし排除してきた多様な物語を通じて、多国籍化によって混沌とした日本社会の体現として見做し、自分たちの視点から日本社会のマイノリティを再構成した映画として評価している。崔洋一⁵⁾監督自信も、映画<血と骨>は日本での「異邦人の存在」として在日朝鮮人を描写した作品だが、日本における「在日朝鮮人」の歴史的・社会的・政治的問題はなるべく背後に退けて、前面的には主人公・金俊平の「個」としての一般性を強く表現したという。⁶⁾しかし、本作も在日社会の「陰」と「内なる他者」としての姿を描いてきた既存の作品と基本的に变りはない。つまり、日本人の観客も受け入れやすいように在日という特定性と固定観念を利用し、映画としての普遍性を獲得しようとした。そこには映画の商業的成功を目指す意識も働

3) 映画<血と骨>は、在日朝鮮人作家梁石日(ヤン・ソギル)の同名小説『血と骨』(1998)を原作として崔洋一が映画化した作品である。映画は日本帝国主義時代に済州島から大阪に移住した在日朝鮮人金俊平(北野武)と彼の家族の壮絶な生涯を描いている。

梁石日(ヤン・ソギル)：1936年大阪府猪飼野生まれの在日朝鮮人二世の作家。代表作は小説『タクシー狂想曲』、『子宮の中の子守歌』、『夜に賭けて』(2002年金守珍により映画化)、『血と骨』などがある。特に、小説『血と骨』は作者の実父をモデルとしている自伝的な小説である。

4) 高和政(2005)「商品化される暴力：映画<血と骨>批判」『季刊前夜第1期4号女たちの現在』影書房 p.40；垣井道弘「崔洋一監督インタビュー 醜悪のゆえに光輝くこともある」『キネヌ旬報』2004年11月下旬 p.33を金祇観(2011)「映画<血と骨>における「怪物的」な男とその女」『文学研究論集』29 筑波大学比較・理論文学会 p.62から再引用

5) 崔洋一(さいよういち)：1949年長野県佐久市で北朝鮮国籍を持つ父と日本人母の間に生まれた在日韓国人2世(国籍を朝鮮から韓国に変更)の映画監督。彼は在日だけでなく、日本社会のマイノリティを扱った作品を多数製作している。代表作としては<月はどっちに出ている>(1993)、<犬走る>(1998)、<豚の靨い>(1999)、<血と骨>(2004)等がある。

6) 東洋経済新聞(2014. 3. 15)「<在日社会>フィルムセンター・崔洋一監督特集”異邦人の存在”を映し出す」
http://www.toyo-keizai.co.jp/news/society/2013/post_5232.php

いていると考えられる。

しかし、本稿では日本人の視点⁷⁾ではなく、在日⁸⁾と韓国人の視点からこの作品を分析したい。何故なら、この映画のテーマである「在日朝鮮人」は当時の社会的・政治的状況と密接な関係の中で形成されたため、その存在の歴史的次元を念頭においた上で接近するのが自明であるからだ。実際に、崔洋一監督の映画<月はどこに出ている>(1993)と<犬走る>(1998)等でも戦後屈折してきた在日社会を知ることができる。従って、映画<血と骨>の至るところに刻印された主人公の病的な暴力性は、当時の社会的状況と関係があると判断したい。

映画<血と骨>の原作は在日韓国人の作家梁石日の同名小説『血と骨』である。そのため、小説に現れた植民地支配の野蛮性や日本社会での在日の他者性、家族関係などの研究⁹⁾と崔洋一監督の作品を含む在日出生の監督作品に表象された在日の変容や映画化によるナラティブ構造の変化に関する研究など多角的な研究¹⁰⁾が先行されてきた。このような研究は徐々に薄れていた在日の存在を再認識させることに大きく寄与したと判断する。しかし、映画<血と骨>のみを研究対象にして、主人公の暴力性の原因を考察する研究は極めて稀である。従って、本稿では先行研究の綿密な検討の上、映画<血と骨>のみを研究対象にして主人公の暴力性を考察する。

分析方法としては、「ナラティブ構造分析」と「グレマス(A. J. Greimas)の記号学モデル」を適用したい。まず「ナラティブ構造分析」を通じてナラティブ展開過程を探る。そして、それを基にグレマスの「行為者モデル」と「記号論的四角形」を適用する。記号学によるテキストの解釈は記号の中に隠れている特別な意図や目的を探りだせる人文学的方法論である。特に、グレマスの「行為者モデル」と「記号論的四角形」は、ナラティブ展開においての人物の機能と四つの要素関係による意味作用の基本構造を提示してくれ

- 7) 在日韓国(朝鮮)人の文学に接近する方法は、一、日本人の視点、二、在日韓国(朝鮮)人の視点、三、韓国人の視点だが、その範囲を狭めれば済州人の視点があるという(김영화(1998)「在日済州人の世界：梁石日の『피와 뼈』」『탐라문화』 19 제주대학교 탐라문화연구소 p.66)。このような方法は在日の文学作品のみならず、在日を題材とした映画にも適用することは可能だと考えられる。
- 8) 本稿での在日の視点は在日一世(オールドカマー)を指す。何故なら現在の在日は三、四世が主流となっており、彼らの思考方式は既に日本人化しているのが現状であるからだ。
- 9) 구재진(2010)「제국의 타자와 재일(在日)의 괴물 남성성: 양석일의 『피와 뼈』 연구」 민족문화사 43 민족문화사연구 pp.367-392 ; 변화영(2012)「폭력과 욕망으로 표현된 식민지배의 야만성 - 양석일의 『피와 뼈』를 중심으로」 영주어문 23 영주어문학회 pp.447-472 ; 유진월(2014)「아버지/ 국가의 존재/ 부재를 건디는 방식-〈피와 뼈〉의 가족관계를 중심으로」『인문과학연구』 23 대구 카톨릭대학교 인문과학연구소 pp.199-222
- 10) 金祇硯(2011)「映画<血と骨>における「怪物的」な男とその女」『文学研究論集』 29, 筑波大学比較・理論文学会 pp.47-65 ; 유양근(2012)「영화 , <피와 뼈>, <막치기>의 변주와 수렴」일본학연구 35 단국대학교 일본학 연구소 pp.133-154 ; 신명직(2013)「제일 코리아나 다국가 시민권 - 영화 “피와 뼈”, “디어 평양”, “달은 어디에 떠 있는가”를 중심으로」 石堂論叢 56 東亞大學附設 石堂傳統文化研究院 pp.37-82 ; 주혜정(2014)「최양일 영화에 나타난 제일코리아인 표상-〈달은 어디에 떠 있는가〉와 <피와 뼈>를 중심으로」『日語日文學研究』 91 한국일어일문학회 pp.487-503

るモデルである。更に、これを映画に適用すると複雑で多様なナラティブ構造での中心人物と対象の明瞭な関係把握はもちろん、主体のナラティブ経路と複合的關係の変化推移を視覚化できる。しかし、このような方法は、登場人物の対立関係と起承転結が明確なテキストに適用するのが最も理想的であるが、本稿で論じる映画を含めて全てのテキストがそうとは限らない。そのため「グレマスの記号学モデル」を様々なテキストに適用するには、多角的な観点から応用する必要がある。

従って、本稿では映画が背景としている社会的状況を関連づけたい。特に、俊平を取り巻く三人の女性の関係構造を当時の社会的状況と関連付けて分析する。それにより、ナラティブ構造での登場人物の図式化を越え、映画が志向している中心的行為とその意味の多様性を知ることが出来る。即ち、彼の暴力性と女性に対する支配欲を、単に人並外れた男の物語ではなく当時の社会的変化と関連付けて考察していく。

2. ナラティブ構造分析：社会的状況を中心に

この映画は俊平の息子・金正雄のモノローグにより、彼の生涯を描いているが、時代的变化と主な事件の展開と転換点を中心に分けると計七つのシーケンスに分けられる。それは俊平の渡日→英姫との結婚→息子・武の登場→戦利品・清子→倒れる清子と賛明の帰国→生殖道具・定子と俊平の衰弱→俊平の帰国と死で構成されている。

一つ目のシーケンスは、1923年東洋のマンチェスターと呼ばれた大阪に、朝鮮人が移住する時代的背景を説明している。冒頭「君が代丸」の甲板の上でのシーンでは、多くの朝鮮人が大阪の街を遠望し、新たな運命に対する期待で歓呼する。そこには主人公・俊平(青年期)もいる。このシーケンスは簡略された設定ショット(establish shot)で構成されており、映画の時代的背景の説明と主人公の登場、そしてこれから大阪を舞台に展開される事件を暗示している。

実際に、1920年代朝鮮の窮乏により多くの朝鮮人が生存のため海外に移住したが、北部の人々は耕す農地を求めて満州に、南部の人々は金を稼ぐため日本に移住したのである。当時朝鮮人は日本に対し、ある幻想を持っていたという。それは植民地朝鮮と、本国日本は経済的な違いが大きく存在するという幻想だった。つまり、窮乏と貧困であった植民地朝鮮より帝国は強力な「富」と「力」を持っていると期待していたのである。だからといって、当時の朝鮮人が経済的な富を求めただけに移住したのではない。日本への移住が急増したのは1917年以降からで、当時朝鮮総督府は土地調査事業(1910年～1918年)を実施し、多くの朝鮮人は土地を収奪されていた。また、朝鮮産米増殖計画(1920年)によって、更に窮乏に陥った朝鮮人は故郷を捨てざるを得なかったのである。¹¹⁾ つまり、

在日朝鮮人の渡日は富と力に対する幻想だけではなく、極端な窮乏から抜け出そうとする生存の本能による行動だと考えられる。

二つ目のシーケンスでは、俊平の最初の女性で妻となった李英姫(リ・ヨンヒ、以下英姫)との出会いと、日本での彼の暴力の始まりを描いている。俊平はある日の夜、英姫が営む食堂に乱入し、英姫に性的暴力を振るう。それを機に英姫は俊平から逃れられない生涯を送ることになってしまう。俊平と英姫の間には二人の子供(姉花子と弟正雄)が生まれるが、家族は毎日のように暴力を振るう俊平に怯える日々を送る。そして、当時日本軍の戦勢が厳しくなるにつれ、親戚の高信義(ゴ・シンギ)まで徴兵されると、俊平は身を潜める。このシーケンスは中心人物のキャラクターと周辺の状態を説明している。特に、英姫は俊平による身体的・性的支配を受ける人物として描かれている。

三つ目のシーケンスの主な事件は息子・武の登場である。終戦後、突然帰ってきた俊平は蒲鉾工場を始め、周りの朝鮮人を悪用し経済力をつける。そんなある日、俊平の息子を名乗る武が現れる。映画では武に関する説明は一切ないが、劇中彼とのやり取りから、武は過去俊平が犯した女性の子であることが分かる。つまり、武の登場によって俊平の暴力性の残酷さをより知ることができる。暫く俊平の家にはいた武はある日、俊平と激しく乱闘する。この乱闘はシーケンスのハイライトとも言えるが、俊平と武の乱闘に対して喻良根は「俊平がこん棒や物で武を殴るシーンは、プロレスリングの反則行為にあたる。しかし、過去の在日朝鮮人一世においてルールは重要ではなかった。彼らが日本社会から生き残るためにはどんな行為もあり得て、それに類似していた一つの象徴的な種目がプロレスリングであった」¹²⁾と指摘している。しかし、このシーンを過去の在日一世の生存に対する強い意志と見做すのは、多少無理がある。このシーケンスは俊平の暴力性が以前から存在していたことを説明している。つまり、息子・武の登場によって彼の暴力性の残酷さを浮彫りにしているからである。

四つ目のシーケンスで、俊平は蒲鉾工場の経営で稼いだ金で、家の向かい側に新しい家を購入し、戦争で未亡人になった日本人の女性清子を愛人として受け入れる。こうした俊平の行動に英姫はもちろん部落の朝鮮人たちも醜く思うが、誰一人何の文句も言えない。俊平は清子に一日でも早く自分の子を産んで欲しいがために、何度も肉体関係を持つが、二年経過しても一向に清子が俊平の子を授かる気配はない。すると、自らが精力剤として食用している腐肉を無理矢理清子に食べさせ、出産を強要する。こうした俊平に対し英姫は強い嫌悪感を抱き、彼が清子と高利貸を始めると反発するように食堂を開く。一方、娘・花子は蒲鉾工場で働いている文学青年張賛明(チャン・チャンミョン以下、賛明)に好意を抱くが、彼は当時非合法組織であった共産党員として活動し逮捕されてしま

11) 구재진(2010) 前掲書 pp.372-373

12) 유양근(2012) 前掲書 pp.140-141

う。

このシークェンスで、俊平は日本人の未亡人清子を愛人として受け入れる。俊平と出会う前の清子は、日本植民地支配と日本帝国主義により民族的・階級的に支配者側、つまり差別を行う側で、俊平は被支配者側で差別を受ける側であった。その力関係が清子自ら「体」を俊平に売ることによって覆ることになる。日本人女性を支配することは、男性による女性の支配の意味とともに日本人・在日朝鮮人の力関係、支配者・被支配者の関係を逆転することを意味する。また、俊平による清子の所有は、日本人男性の日本人女性への所有権・財産権の侵害であり、その侵害は資本主義の力に基づいている。¹³⁾ 即ち、過去の支配者であった日本人と被支配者であった朝鮮人の関係が資本主義の力によって逆転されたのである。

また、賛明の共産党員としての活動は、朝鮮解放以降も続いた日本社会の差別とイデオロギーの対立におかれた祖国の状況による在日のアイデンティティー問題を間接的に表わしているシーンだと考えられる。実際、日本帝国主義の植民地統治下での在日朝鮮人の連帯性はかなり薄かったという。当時一部の朝鮮人の知識人が展開した各種運動(反民族運動、民族主義運動、共産主義運動)は在日朝鮮人社会の分裂と対立をより強くした。こうした背景から朝鮮解放後、在日朝鮮人は帰国問題と生活安定のため単一同胞団体を形成したが、それは政治的性向により在日朝鮮人社会を更に分裂させてることになってしまう。同胞団体で始まった「在日本朝鮮人連盟」が日本共産党の指導下に入ったことに反発した同胞が「在日本朝鮮居留民団」を結成したのである。¹⁴⁾ このように当時の在日朝鮮人社会の連帯性は薄く、韓国戦争以降の祖国分断によって在日社会の対立と分裂は一層強くなった。

五つ目のシークェンスは、清子が脳腫瘍で倒れるところから始まる。俊平は愛人である清子を見捨てずに看病するが、それにより抑制できない怒りを解消するように、再び家族に向けて暴力を振るう。俊平に暴力を振られた花子は自殺を図り、それに憤慨した正雄は銭湯にいる俊平を殺そうとするが、結局失敗してしまう。一方、出所した賛明は、在日の帰国運動¹⁵⁾により当時「地上の楽園」と呼ばれた北朝鮮に帰国して音信不通になってしま

13) 金祇硯(2011) 前掲書 p.52

14) 조현욱(1999) 「북한의 제일 조총련에 관한 연구」 경기대학교 통일안보대학원 석사학위논문 pp.16-20

15) 日本の敗戦直後、約220~240万人の在日朝鮮人が存在した。祖国が解放されると朝鮮人の帰国は直ちに始まり、1945年8月~50年6月まで約150~190万人が朝鮮に帰国した。しかし、1950年6月韓国戦争が勃発すると、日本と韓国を繋ぐ航路が途切れてしまう。この時点で約60万人の在日朝鮮人が日本に残っていた。再び帰国が可能になったのは、韓国戦争が休戦になった1953年7月である。しかし、韓国戦争以降多くの在日朝鮮人は故郷である韓国ではなく、北朝鮮への帰国を要求し始めた。こうした帰国要求は1959年12月になり実施され、最初の帰国船は、新潟港から北朝鮮の清津港を航海した。その時の帰国船には957人が乗船し、その後北朝鮮と日本赤十字による帰国協定に基づき、事業が終わる1984年第167回帰国船まで93,339人が帰国した。その内帰化した朝鮮人を含め日本国籍所持者は6,679人(日本人妻1,671人)だった。25年間に渡って実施されたこの

う。16) 賛明は北朝鮮に向かう列車で正雄に「僕も今日から北の詩人じゃ！正雄、僕ら一人一人が一編の詩なんや！今この瞬間が詩なんや！詩書け、詩！」というが、それは当時の帰国運動を主導した在日本朝鮮人連盟が多くの文学作品に帰国実現の感動を形像化することに主力したからである。とはいえ、当時の在日に帰国運動がもつ意味は格別であった。帰国先が南であれ北であれ、他国から逃れてきた在日にとっては感動的な事件で、そうした感動の根底には何より帰国に対するノスタルジーがあった。17)

このシーケンスで注目すべき点は、俊平が脳腫瘍で倒れた清子を見捨てずに看病するという事と賛明の帰国である。俊平は経済力で獲得した清子を大事に看病するが、それは自分が獲得したものによってまた支配されることになる。また、賛明の帰国は祖国が解放されても被支配者であり続けた「在日」という身分から脱出するための最終の選択だったと考えられる。

六つ目のシーケンスは俊平の暴力性が極まる本作のクライマックスとも言える。このシーケンスで登場する定子は、家事の手伝いと俊平の繁殖欲を満たすために雇用した女性である。彼女には清子の死後、俊平の妻として財産を受け取る目論見があったため、彼からの数々の暴力に耐え忍んでいる。俊平は定子との生活が安定すると清子を殺してしまう。一方、英姫は癌を患うことになるが、俊平は治療費を一銭も援助しない。そうした俊平に正雄は憤慨し、二人はより対立する。その後、俊平と定子の間に竜一が生まれるが、賛明の帰国後同じ在日と結婚した花子は旦那の暴力から逃れられず、自殺してしまう。花子の死で怒り狂った俊平は、花子の葬式で大暴れし下半身麻痺になってしまいが、それは今後衰弱していく俊平を暗示する事件だと考えられる。そして英姫は、結局俊平から何の援助も受けることなく、病状が悪化し死に至る。

このシーケンスで定子は、俊平が下半身麻痺になると彼の暴力を逆に利用し、俊平に復讐するが、これは単に女による男への逆襲とは考えがたい。俊平は在日であるにも関わらず、圧倒的な財力で日本人女性を獲得してきたが、その力を失うことによって日本人との関係が元通りになったのである。つまり、植民地主義的關係における日本から在日への暴力

事業で、約10万人の在日朝鮮人が北朝鮮に永住帰国した。これが言わば、帰国運動(帰国事業、帰還・北送事業)である(金英達・高柳俊(1995)『北朝鮮帰国事業関係資料集』新幹社 p.3)。

16) 帰国運動に関する日本と北朝鮮政府の背景は次の通りである。当時在日は、主に日本国内の左翼とともに政権の批判勢力として活動していて、朝鮮人の存在は政治的負担であった。また、その大半が貧困層だったため経済的負担でもあった。こうした理由から当時の日本政府が朝鮮人の帰国を敢えて拒む必要はなかった。一方、北朝鮮の場合在日の帰国を通じて韓国戦争で不足していた北朝鮮内の労働力の補充と、在日社会と血縁の紐帯関係を形成し、在日社会に対する影響力を強化しようとした。このため北朝鮮は、帰国する在日に衣食住はもちろん、仕事や定着費用(成人1人当たり2万円、児童1万円)を支給すると宣伝していたのである。こうした背景から当時、多くの在日は韓国より北朝鮮へ帰国したとみられる(이광규(1983)『在日韓國人：生活實態를 중심으로』일조각 pp.64-65)。

17) 김형규(2005)『귀국운동과 '재일(在日)'의 현실: 재일본 문학예술가동맹의 소설을 중심으로』『한중인문학연구』15 한중인문학회 p.417

がまた再現されたと考えられる。一方、俊平と正雄の対立で、正雄は初めて俊平に立ち向かうが、彼は俊平から逃げることはできない存在として描かれる。俊平は英姫の治療費の援助はおろか、定子との生活が安定すると清子を殺してしまう。彼にとって障害だった英姫と清子に対する憐憫等もう存在しないのである。こうした俊平の行動は、当時日本社会の差別と抑圧の中、生き残ることに必死だった在日の姿を極端に表しているのだと考えられる。

最後のシーケンスで、俊平は正雄に自分の面倒をみることを要求するも拒絶されてしまう。すると、俊平は定子との間で生まれたもう一人の息子竜一を拉致して、北朝鮮に帰国する。そして、1984年中国との国境地域にある北朝鮮の田舎で一人寂しく死んでいく。最後のシーン、死んでいく俊平を見たにも関わらず、何事もなかったように食事をし続ける竜一の行動から、俊平に対する彼の憎しみが感じられる。彼は帰国運動で親とともに北朝鮮に帰国した在日二世の表象とも言える。映画は彼らが今後どのように生きていくべきかを問いかけてながら幕を閉じる。

以上の分析を通して、映画のナラティブ構造が俊平と三人の女性との関係を中心に展開されると、登場人物の行為を当時の社会状況と関連づけて解釈できることが判る。特に、俊平と彼を取り巻く三人の女性との関係や事件は、彼の暴力性を分析する重要な手がかりになると思われる。従って、次の章では「グレマスの記号学モデル」を適用し、俊平と彼を取り巻く女性との関係構造を、当時の社会的状況と関連づけて分析したい。何故なら、「グレマスの記号学モデル」を適用することによって映画のナラティブ構造の中心人物と対象の明瞭な関係把握や主体のナラティブ経路と複合的關係の変化推移を視覚的に図式化できるからである。

3. グレマスの記号学モデル分析:俊平を取り巻く三人の女性を中心に

ウラジーミル・プロップ(Vladimir Iakovlevich Propp)の『昔話の形態学』(1927)は当時ステイス・トンプソン(Stith Thompson)のモチーフ中心(定形された人物:神、魔法師等、行動の背景の中にある要素:魔法を持っている物、奇異な習慣、単一な事件等)の魔法昔話の研究とは違い、潜在されている形式的関係網に注意を払い、既存の魔法昔話の研究を画期的に覆した。彼は魔法昔話を形成している人物と対象は多種多様であるが、これらの行動は限られていることを発見した。即ち、人物と対象は可變的で行動は不変であると考え、後者を自分の研究対象としたのである。もちろん、魔法昔話での行動は様々な形態として現れるが、彼はこうした行動を抽象化し、幾つもの「機能(Function:物語の展開の中、状況によって定義された人物の行動)」に還元した。その結果、ロシア

の全ての魔法昔話を31種類に制限した機能¹⁸⁾からなり、その機能は一定の順序で展開されるというのである。¹⁹⁾

しかし、この大きな発見のほかに、もう一つ大切な視点が含まれていた。それは①加害者②贈与者③援助者④王と王女⑤委任者⑥主人公⑦ニセの主人公という魔法昔話を構成する登場人物の類型化である。これによって魔法昔話は「七人の登場人物によって構成される物語」として定義された。この類型は、昔話の構造と生成を考える上できわめて重要であるが、機能分析の場合に比べて、この作業は慎重さを欠いていたといっただろう。プロップは、この七人の登場人物のそれぞれに機能を割り当てているのだが、その相関関係をほとんど考えていないように思われる。しかしグレマスは、この登場人物を整理し、互いに相関させながら①送り手②対象③受け手④援助者⑤主体⑥敵対者の六人の行為者(actant)からなる「行為者モデル」を作り上げた。²⁰⁾

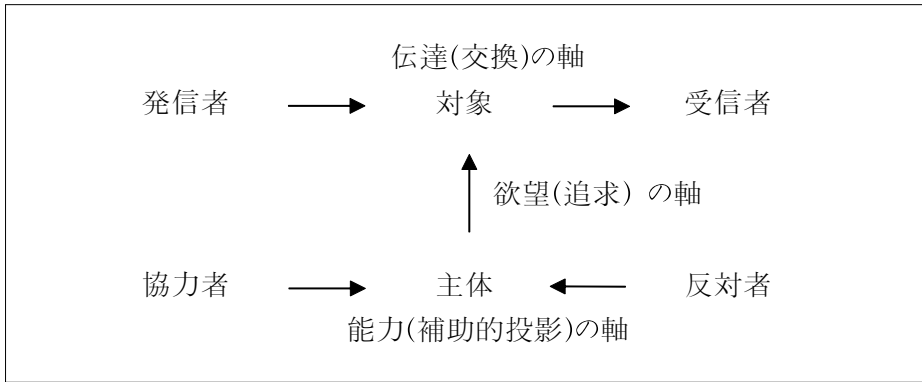
グレマスの「行為者モデル」はプロップの「七人の登場人物」と基本的な要素は変わらない。しかし、彼のモデルがプロップの場合と根本的に異なるのは、それが登場人物の一覧表に留まらず、六人の行為者が「三つの軸」によって相互密接に関係づけられていることである。これをプロップの用語に置き換えると、主体一対象は主人公一探す人物と女王に該当し、これらは「欲望の軸」、若しくは「追求の軸」で繋がれている。何故なら、全ての物語には主体に欠けているもの、即ち獲得すべき対象(課題)があるからだ。そして、発信者一受信者はプロップの委任者と王一主人公に該当し、発信者と受信者は「伝達(交換)の軸」で繋がれている。ここで、発信者は主体の活動を指示する行為者で、主体が獲得した結果を受け入れる側が受信者であるが、発信者と受信者は主体と同一行為者になる場合もある。最後に協力者一反対者は、援助者と贈与者の重合一悪者とニセの主人公に該当し、協力者と反対者は「能力(補助的投影)の軸」で繋がれている。協力者は主体が対象を獲得できるように助ける行為者で、反対者は主体の欲望を妨げる行為者である。「行為者モデル」は、物語が進むに連れ登場人物の役割と機能を提示してくれるモデルであって、プロップの『昔話の形態学』に比べ、より普遍性を持っているため魔法昔話だけではなく、実話的なテキストに適用できる。²¹⁾

18) プロップによる昔話の構造31の機能分類は次の通りである。1.年長者の不在 2.禁止 3.禁止の侵犯 4.敵対者の質問 5.情報の提供 6.奸計 7.主人公の協力 以上は予備的段階で、話は、機能 8から本格的に発展する。8.加害行為、または欠落 9.仲介 10.反撃の始末 11.主人公の出発 12.魔法の手段の贈与者の最初の機能 13.それに対する主人公の反応 14.魔法の手段を手に入れる 15.主人公の移動 16.敵対者との闘争 17.主人公が印を受ける 18.勝利 19.不幸または欠落の回復 20.主人公の帰還 21.主人公が追跡される 22.助かる 23.主人公がこっそり到着する 24.にせの主人公がうその主張をする 25.難問 26.難問の解決 27.主人公が識別される 28.ニセの主人公の発覚 29.主人公の変身 30.処罰 31.結婚(日本口承文芸学会編(2008)『シリーズ・ことばの世界第2巻・かたる』三弥井書店 p.118)。

19) 박인철(2003) 『과리학과파의 기호학』 민음사 pp.130-139

20)樋口淳(1989)「物語の意味論：怖がることを習いに出かけた若者の話をめぐって」『専修人文論集』44 専修大学社会科学研究所 pp.1-2

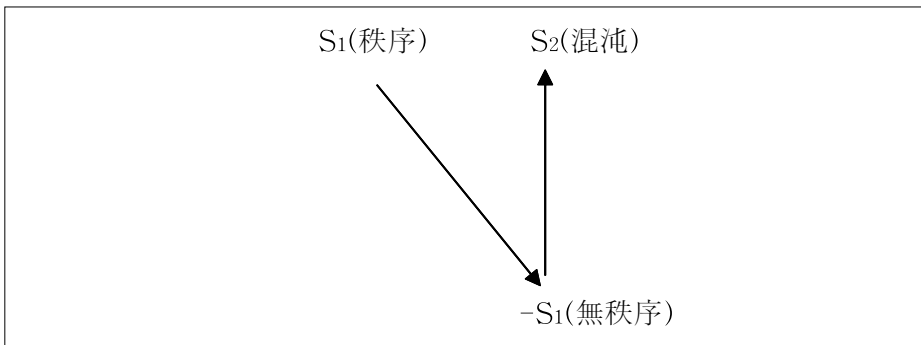
<図1> 行為者モデル



従って、それを映画に適用すると、複雑で多様なナラティブ構造での中心人物と対象の明瞭な関係把握はもちろん、中心人物と対象の関係を基にした構造の追跡やその他の行為素との関係も把握することが出来る。²²⁾ こうした「行為者モデル」は、グレマスの「記号論的四角形」とともに適用するのが、最も理想的である。

「記号論的四角形」は、グレマスがアリストテレスの著書オルガン(Organon)の中、解釈に関する概論から借用し作り上げた意味作用の分析モデルである。それは、意味作用の基本構造である二項対立と二分法的な思考だけではなく、二項対立、矛盾関係、含意関係を借用することによって意味生成の新たな思考体系を論理的に提示したのである。²³⁾

<図2> 記号論的四角形の構成



グレマスによると、私たちの認識が普遍的客観性を持つのは、それが絶対的というより相対的に形成されるからだという。例えば、Sという要素を説明する時、私たちはまずそれを否

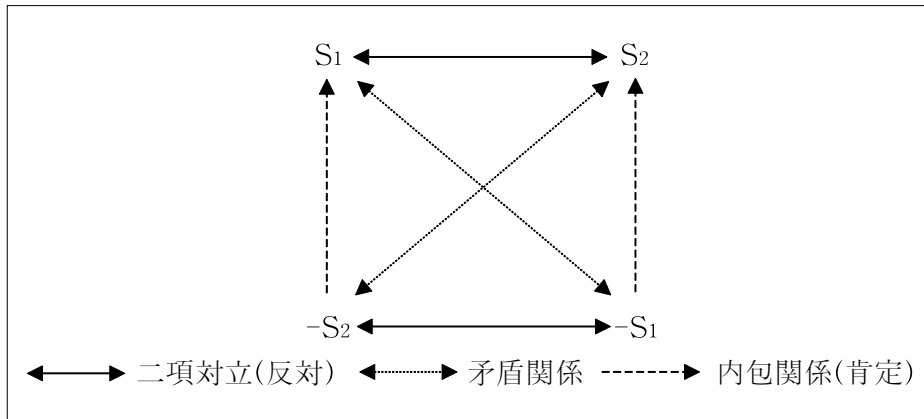
21) 박인철(2003) 前掲書 p.156

22) 백선기(2007) 『영화 그 기호학적 해석의 즐거움』 커뮤니케이션북스 p.69

23) 김성도(2002) 『구조에서 감성으로 : 그레마스의 기호학 및 일반 의미론의 연구』 고려대학교 출판부 p.29

定してみ、それから相反するものを探す。否定を $S_1(=-S_1)$ 、反対を S_2 だとしたら、 $S \rightarrow -S_1 \rightarrow S_2$ のような一つの結果に繋がる。ここで S_1 と $-S_1$ は矛盾関係(contradiction)を、 $-S_1$ と S_2 は内包(含意)関係(deixis)を形成する。前者は否定(négation)によって成立し、後者は肯定(affirmation)により成立する。このような段階により S_2 と S_1 は反対関係(contrariété)になる。従って、反対関係は否定により得られるのが普通である。 S_2 と $-S_1$ は内包概念で、 $-S_1$ の内包概念が肯定的操作により確認されるのが S_2 である。結果的に S_2 と $-S_1$ は前提関係(présupposition)になる。例えば、「秩序」の否定は「非秩序」若しくは「無秩序」になり、それを肯定にすると「混沌」になる。同時に「混沌」の出発要素である「秩序」の反対になる。つまり、反対関係は与えられた要素を否定して肯定する作用により得られるのである。このような「記号論的四角形」は論理一意味論の手順と過程を重んずる。また、 S_2 から出発しても同じような方式で S_1 に辿り着ける。その図式を合わせたのが「記号論的四角形」である。²⁴⁾

<図3>記号論的四角形



即ち、記号論的四角形は四つの要素(élément)若しくは項(terme)の関係で形成される。まず、 S_1 と S_2 、 $-S_1$ と $-S_2$ の間には反対関係、 S_1 と $-S_1$ 、 S_2 と $-S_2$ の間には矛盾関係、 $-S_1$ と S_2 、 $-S_2$ と S_1 の間には内包関係が形成される。そして、以上の項の関係はすべて肯定と否定的操作の結果である。二項否定または二項対立関係は結果的に四角的相互関係に発展し、意味作用の基本構造(structure élémentaire de la signification)の枠を提供してくれる。

このような記号学モデルを映画に適用すると、映画のナラティブ構造の意味の多様性の把握や意味関係の複合的關係の変化推移を発見することが出来る。つまり、二項対立を通じて提示さ

24) 서정철(1992) 「그레마스의 기호학 사각형」 『외국어교육연구』 8 한국외국어대학교부설 외국어교육연구소 p.104

れる意味だけではなく、内包関係、矛盾関係の意味作用を探ることによってテキスト全体の意味体系の構造や登場人物の複合的關係の変化推移を視覚的に図式化することができる。

しかし、「行為者モデル」と「記号論的四角形」は勸善懲惡や復讐等をテーマとしたテキスト、言わば登場人物の対立関係と起承転結が明確な神話(myth)等のテキストに適用するのが確実である。しかし、本稿で論じている映画はもちろん、全てのテキストがそうとは限らない。そのため、多角的な方法を応用する必要がある。従って、本稿では「グレアムの記号学モデル」に映画が背景としている社会的状況を適用したい。何故なら、本作は過去の社会的・政治的状況と密接な関係の中で形成された在日の生涯を主なテーマとしているため、当時の社会的状況を念頭におくことにより映画が志向している中心的行為とその役割を知ることが出来ると考えられるからである。従って、映画〈血と骨〉の主人公・金俊平の暴力的行為を分析するため、彼と三人の女性との関係を当時の社会的状況を基に「グレアムの記号学モデル」を適用したい。

まず、俊平の最初の女性である英姫との関係を探ってみよう。英姫は俊平との関係で何の快樂も感じられず、性的・精神的・経済的暴力を受ける徹底的な犠牲者として描かれている。英姫に対する俊平の暴力は、当時の在日朝鮮人がおかれた社会的状況から考察する必要がある。

朝鮮半島において「家父長制」は、儒教的規範を強く受容し、儒教を背景として性別に基づく強い役割意識が植えつけられていた。しかし、1905年の第二次韓日条約(乙巳条約)の締結を境に、日本帝国は近代国家建設と国力培養のため、社会の基本である家庭の改革を提唱し、国民教育を強調した。特に、次世代の教育²⁵⁾を担う女子の教育の必要性が高まった。そこで女性教育に用いられたのが「賢母良妻」イデオロギーだが、1910年の韓日合併によって「賢母良妻」イデオロギーが定着したのである。この際の「賢母良妻」イデオロギーは、合併前の儒教に基づいた「賢母良妻」イデオロギー²⁶⁾とは異なり、日本帝国の植民地支配の一環として移入された「日本の女子教育制」の一環をなすものであった。こうした日本帝国による女子中等教育政策は、朝鮮半島の男性にとっての唯一の支配の場であるはずの「内」までもが奪われてしまう恐れを感じさせたのである。そのため、彼らは家庭内での優位性と日本帝国による政治的・経済的差別から、家族を守るべく更に「家父長制」を強化したのである。²⁷⁾ 即ち、日本帝国が植民地統治

25) 日本帝国は日中戦争と日露戦争以降、ナショナリズム高揚の一環として、明治28年から39年にかけて国力増強のための「女学振興」の必要性が政界や教育界から論議され、そこで「良妻賢母」思想とそれに基づく教育政策が生まれた(深谷昌志(1998)『良妻賢母主義の教育』黎明書店 pp.139)。

26) 韓日合併前の「賢母良妻」像は、国民たる夫の内助者、次世代の国民の教育者、家庭管理などの役割が遂行できる「賢母良妻」的な女性であり、その養成を目的として女性教育が実施された。つまり、近代国民国家を建設するため社会の原動力になる家庭を改革することは、まず家庭の主体者になる婦人のあり方から変えさせる必要性が出てきたと見て取れる(金真淑(2003)「日本の「良妻賢母」と韓国の「賢母良妻」にみる女性教育観」『日本近代国家の成立とジェンダー』栢書房 pp.30-31を金祇硯(2011) 前掲書 p.63から再引用)。

27) 上掲書 p.50

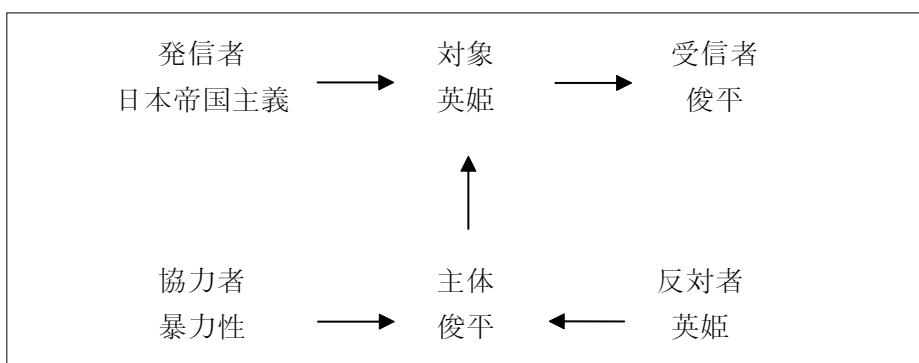
のために実施した政策は朝鮮人男性に家庭での支配欲を助長させたのである。

こうした背景からすると、英姫に対する俊平の暴力は日本帝国が植民地統治の一環として実施した政策によって定着した「賢母良妻」イデオロギーの変容から家庭内での優位性を守るための行為だと考えられる。

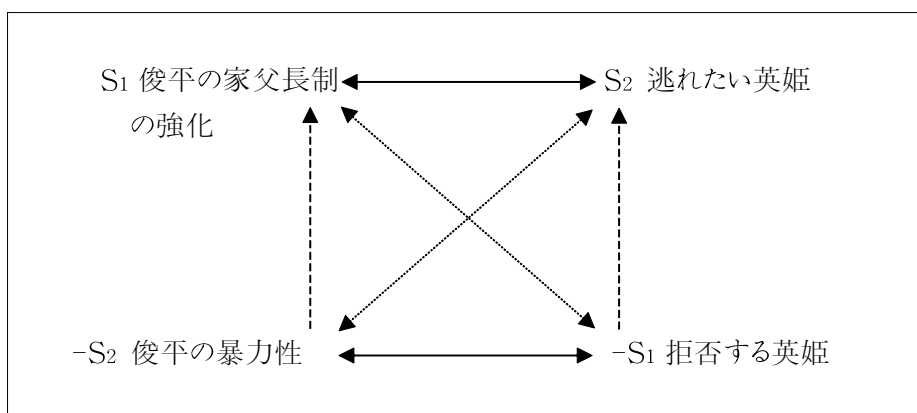
上記内容を基に俊平と英姫の関係を行為者モデルに適用すると、発信者は日本帝国主義の植民地統治政策になる。対象は英姫で、受信者は「家父長制」の強化と性欲を充足する俊平になる。協力者は彼の病的な暴力性で、反対者は俊平を拒否する英姫になる。

また、俊平と英姫の関係を記号論的四角形に適用すると、まずS₁は英姫に対する俊平の家父長制の強化になる。それを否定する-S₁は、その俊平の性的、精神的、経済的暴力を拒否する英姫になる。-S₁を肯定すると、彼の暴力から逃れたい英姫になる。また、逃れたい英姫を否定する-S₂は、俊平の暴力性で、それを肯定するS₁は英姫に対する俊平の家父長制の強化になる。

<図4> 俊平と英姫の行為者モデル



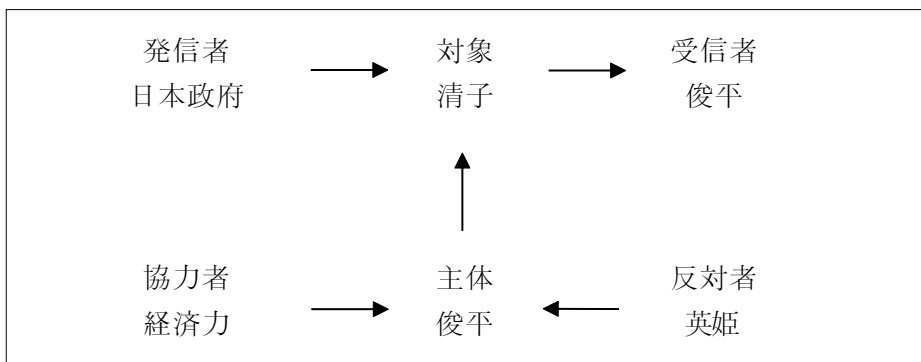
<図5> 俊平と英姫の記号論的四角形



次に清子との関係だが、戦後俊平が蒲鉾工場の経営で稼いだ金で日本人の未亡人清子を獲得するというのは、日本帝国主義からの差別と抑圧を受けた朝鮮人(被支配者)と日本(支配者)の関係が逆転されたことを意味する。特に、俊平が清子を自転車に乗せ、自慢げに町を走るシーンでは清子が単なる女性ではなく、在日朝鮮人の日本帝国主義からの勝利の「戦利品」としての意味を持つ。また、彼が清子に腐肉を食べさせて妊娠(出産)を強要するのは、朝鮮の男児選好思想だけではなく、当時の時代的背景と関連づけて考えられる。

1945年8月終戦直後、在日朝鮮人の帰還は直ちに実施されたが、日本政府が祖国に持ち帰れる財産を一人当たり千円に制限した。そのため生活問題等の様々な理由で帰還できない人も当然いた訳で、その数は1946年の時点で約64万人にも及んだ。こうした朝鮮人の存在は、ある意味日本帝国主義の植民地統治の結果であり、日本政府としても残留した朝鮮人に対して責任を持つべきだった。しかし、その殆どが貧困層のため日本政府は財政的負担はもちろん、政治的・社会的不安を惹起する存在だと見做し追放政策を実施した。まず、日本政府は1946年GHQとともに全ての在日朝鮮人を帰還登録させた。それに応じない朝鮮人には法的な制裁を加えると同時に、韓国政府が自国民として認めるまで日本国籍を保留すると発表し、それに反発する朝鮮人の反感を利用して強制的な追放政策を行った。更に、サンフランシスコ条約(1951年締結、1952年発効)で主権を取り戻した日本は、在日の日本国籍喪失を公式に宣言し、朝鮮人追放に拍車をかけた。²⁸⁾ こうした背景からすると、俊平が清子に出産を強要するのは、日本社会の一員として生き残るための行為だと考えられる。

<図6> 俊平と清子の行為者モデル



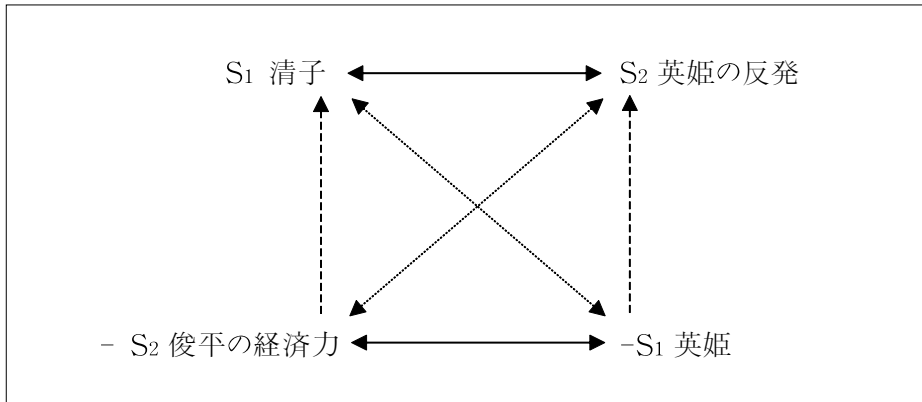
清子との関係を行為者モデルに適用すると、発信者は終戦直後日本政府が実施した朝

²⁸⁾ 김왕식(2005) 「재일 한국인의 민족 정체성 변화와 그 촉진 요인」 『국제한국언어문화학회 학술대회』 1 국제한국언어문화학회 p.43

鮮人追放政策になる。対象は彼が経済力で獲得した清子で、受信者は社会的地位の向上と性欲を充足する俊平になる。協力者は彼の経済力で、反対者は彼と清子の関係を不満に思い反発するように店を開く英姫になる。

また、俊平と清子の関係を記号論的四角形に適用すると、S₁の清子を否定する-S₁は英姫になる。それを肯定するS₂は俊平に反発するように店を開く英姫になる。また、S₂を否定する-S₂は俊平の経済力で、それを肯定するS₁は清子になる。

<図7> 俊平と清子の記号論的四角形



最後に、定子との関係だが、彼女は家事手伝いとともに俊平の繁殖欲(性欲)の解消のための生殖道具として迎え入れられた女性である。彼女は俊平から朝鮮半島の家父長制に基づく性的・精神的・経済的暴力を振るわれる。しかし、俊平が娘の葬式で下半身麻痺になり、男としての力を失うことによって彼女は彼の力の原理を逆利用して俊平に復讐する。また、このシーケンスで俊平は定子との間で竜一が生まれると清子を殺してしまう。これは劇中描かれた俊平の暴力性のクライマックスとも言える。

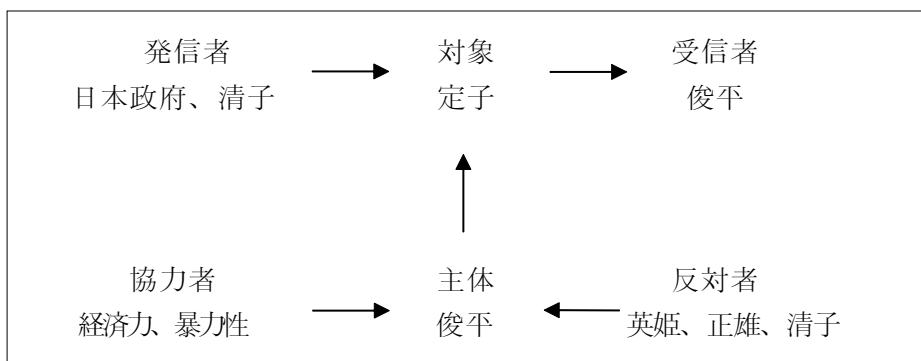
当時、日本は法的差別を通して在日を追放または同化させたが、そうした日本政府の立場は韓日で行われた在日韓国人の法的地位協定の結果がそのまま反映されたものだった。韓日会談を観た在日は、韓国政府が在日に対して日本に同化せざるを得ない運命であることを念頭においていることを自覚していた²⁹⁾ 従って、在日が日本政府の差別的同化政策の元で自分の権利を獲得するためには、日本社会に同化されるしかなかった。また、日本への帰化を選択した在日が日本社会で差別を受けないためには、日本人らしく行動しなければならなかったのである。こうした背景からすると、定子に対する暴力は、日本政府の半強制的同化政策から自分を守るための行為だと考えられる。

29) 上掲書

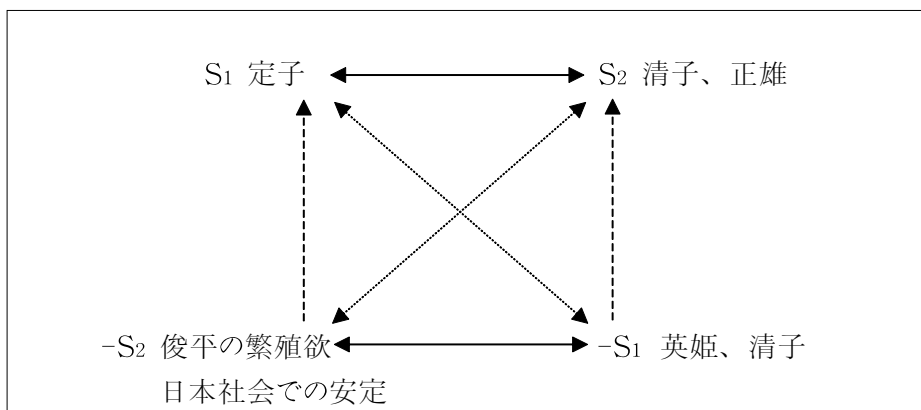
定子との関係を行為者モデルに適用すると、発信者は脳硬塞になった清子と韓日会談に基づき在日を追放または同化させた日本政府になる。対象は定子で、受信者は繁殖欲の充足と日本社会での安定を求める俊平になる。協力者は彼が高利貸で稼いだ金(経済力)と暴力性で、反対者は英姫と正雄そして、定子を拒否する清子になる。

また、俊平と定子の関係を記号論的四角形に適用すると、S₁の定子を否定する-S₁は英姫と清子になる。それを肯定するS₂は定子を拒むが、結局俊平に殺される清子と英姫が死に至るまで、何の援助もしなかった俊平に怒りを感じ激しく乱闘する正雄になる。また、S₂を否定する-S₂は俊平の繁殖欲と日本社会での安定で、それを肯定するS₁は生殖道具である定子になる。

<図8> 俊平と定子の行為者モデル



<図9> 俊平と定子の記号論的四角形



以上のように、グレマスの記号学モデルを通じて俊平と彼を取り巻く三人の女性の関係構造を当時の社会的状況と関連づけて分析することで、映画が志向している中心的行為と

役割の分析が可能である。

上記分析をまとめると、俊平の最初の女性である英姫に対する暴力は、日本帝国が植民地統治の一環として実施した政策によって定着した「賢母良妻」イデオロギーの変容から家庭内での優位性を守るための行為である。また、蒲鉾工場の経営で稼いだ金で獲得した清子に対する暴力は、終戦直後日本社会の混乱の中、日本社会の一員として生き残るための行為である。最後に、生殖道具であった定子に対する暴力は、戦後日本政府の半強制的同化政策から自分を守るための行為である。

結局俊平は、周りに見捨てられ自分の全財産を北朝鮮に寄付して帰国するが、誰にも見守られることなく一人寂しく死んでしまう。こうした俊平のネガティブな生き様は、過去の日本社会の差別と抑圧の中で生きてきた在日一世たちの屈折と日本社会での彼らの限界を事実に表しているのだと考えられる。即ち、映画<血と骨>での俊平の暴力性は日本帝国主義の植民地統治と戦後日本社会の混乱による在日の産物とも言える。

4. まとめ

本稿では、映画<血と骨>が日本国内で異常な男とその家族の話、若しくは混沌とした日本社会の単純なマイノリティを描いた映画として評価されることに疑問を持ち、当時の社会的な状況を基に「ナラティブ構造分析」と「グレマスの記号学モデル」を適用して主人公・金俊平の暴力性を分析した。

まず、ナラティブ構造分析では時代的变化と主な事件の展開と転換点を中心に俊平の渡日→英姫との結婚→息子・武の登場→戦利品・清子→倒れる清子と賛明の帰国→生殖道具・定子と俊平の衰弱→俊平の帰国と死で構成され、計七つのシーケンスに分けられた。ここでは、主な登場人物の行為を当時の社会的状況と関連づけて、その行為の原因を探ってみた。その結果、俊平を含む主な登場人物の行為は当時の社会状況から解釈することができた。また、俊平と彼を取り巻く三人の女性との関係や事件が、彼の暴力性を分析する重要な手がかりになると判断した。

従って、俊平の暴力的行為と彼を取り巻く三人の女性との関係を、当時の社会的状況に結び付けてグレマスの「行為者モデル」と「記号論的四角形」を適用した。何故なら、グレマスの記号学モデルを映画に適用することによって、映画の中心人物と対象を根幹とした映画の構造把握やナラティブ構造の複雑な意味関係の変化推移を発見することが出来るからである。しかし、「行為者モデル」と「記号論的四角形」は神話(myth)のように登場人物の対立関係と起承転結が明確なテキストに適用するのが理想的であるが、本稿で論じた映画はそのようなテキストではない。そのため、多角的な方法を応用する必要

があると考え、映画が背景としている社会的状況を適用した。そうすることにより映画が志向している中心的行為と役割を知ることが出来ると判断した。

「行為者モデル」を通じて映画のナラティブ構造での中心人物と対象の明瞭な関係を把握した。また、女性に対する彼の暴力の原因を当時の社会的状況と関連づけてみた。

「記号論的四角形」では、三人の女性を中心に置き二項対立だけではなく、矛盾関係、内包関係による意味関係を把握して主体のナラティブ経路と複合的關係の変化推移を視覚的に図式化した。

まず、英姫に対する彼の暴力は、日本帝国主義が実施した女性教育による「賢母良妻」イデオロギーの変容から朝鮮人男性が「家父長制」を強化するための行為である。また、清子に強制的に腐肉を食べさせることまでして出産を強要するのは、終戦直後日本社会の混乱の中、日本社会の一員として生き残るための行為である。最後に、定子に対する暴力は、戦後日本政府が在日に対して実施した半強制的同化政策から自分を守るための行為である。

本作は、過去日本社会で植民地の国民として生き残るために必死だった在日一世の姿を極端に描いている作品であるが、彼の非常識な行動が当時の在日全体を表象し、そのような暴力が全て正当化される訳ではない。しかし、彼の行動を当時の社会的状況と関連づけることによって、単に在日一世の異常な男の物語ではないことが解る。即ち、映画〈血と骨〉は人並み外れた一人の男の生涯を描いた映画だとは言い難い。何故なら、映画の至るところに刻印されている多様な形の暴力は、当時急変した社会的変化に対する在日の反動だと思われるからである。

2000年以降、日本では在日をテーマにした多様なジャンルの映画が製作されている。そのような映画が本稿で分析した〈血と骨〉同様、単純なマイノリティ映画として評価される可能性がないとは言えない。しかし、在日は過去の社会的・政治的状況と密接な関係を持って形成された存在である。従って、今後在日をテーマにした映画に対し多角的な分析が先行されるべきであるとともに、そのような研究を通して痛ましい歴史の中で徐々に消えている在日の存在を再確認する必要がある。

【参考文献】

- 李南錦(2006)「植民地の新女性と母性イデオロギーへの闘い：羅 [ケイ] 錫(ナ・ヘソク)の小説「瓊姫(キョンヒ)」と彼女の言説分析を通して」『お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』9 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター
- 小野坂弘(1998)「物語の意義と構造(三)」『法政理論』19(4) 新潟大学法学部 pp.59-80
- 金英達・高柳俊(1995)『北朝鮮帰国事業関係資料集』新幹社 p.3
- 金祗硯(2011)「映画<血と骨>における「怪物的」な男とその女」『文学研究論集』29 筑波大学比較・理論文学会 pp.47-65
- 崔洋一(1994)『月はどっちに出ている 崔洋一の世界』日本テレビ放送網株式会社
- 崔洋一・梁石日・鄭義信(2004)『血と骨の世界』新幹社 pp.13-84
- 樋口淳(1989)「物語の意味論：怖がることを習いに出かけた若者の話をめぐって」『専修人文論集』44 専修大学社会科学研究所 p.1-28
- 日本口承文芸学会編(2008)『シリーズ・ことばの世界第2巻・かたる』三弥井書店 pp.118-127
- 深谷昌志(1998)『良妻賢母主義の教育』黎明書房 pp.139
- 文京洙(2005)「戦後日本の地域社会の変容と在日朝鮮人」『立命館国際研究』18(1) 立命館大学国際関係学会
- 梁仁実(2002)「やくざ映画における「在日」観」『立命館産業社会論集』38(2), 立命館大学産業社会学会
- _____ (2003)「戦後日本映画における「在日」女性像」『立命館産業社会論集』39(2) 立命館大学産業社会学会
- 梁石日(2001)『血と骨』幻冬舎
- 東洋経済新聞(2014. 3. 15)「在日社会フィルムセンター・崔洋一監督特集異邦人の存在を映し出す」http://www.toyo-keizai.co.jp/news/society/2013/post_5232.php
- 구재진(2010)「제국의 타자와 재일의 괴물 남성성：양석일의 피와 뼈 연구」『민족문학사연구』43 민족문학사학회 pp.367-392
- 김성도(2002)『구조에서 감성으로：그레마스의 기호학 및 일반 의미론의 연구』고려대학교 출판부 p.29
- 김영화(1998)「在日濟州人の世界：梁石日の『피와 뼈』」『탐라문화』19 제주대학교 탐라문화연구소 pp.51-67
- 김왕식(2005)「재일 한국인의 민족 정체성 변화와 그 촉진 요인」『국제한국언어문화학회 학술대회』1 국제한국언어문화학회 pp.187-199
- 김형규(2005)「귀국운동과 ‘재일(在日)’의 현실：재일본 문학예술가동맹의 소설을 중심으로」『한중인문학연구』15 한중인문학회 pp.411-432
- 박인철(2003)『파리학파의 기호학』민음사 pp.130-157

- 백선기(2007) 『영화 그 기호학적 해석의 즐거움』 커뮤니케이션북스 p.69
- 변화영(2012) 「폭력과 욕망으로 표현된 식민지배의 야만성: 양석일의 피와 뼈를 중심으로」 『영주어문』 23 영주어문학회 pp.447-472
- 서정철(1992) 「그레마스의 기호학 사각형」 『외국어교육연구』 8 한국외국어대학교 부설 외국어교육연구소 pp.103-124
- 요모타이누히코 · 강태웅 역(2011) 『일본영화의 래디컬한 의지』 소망출판 pp.188-215
- 이광규(1983) 『在日韓國人: 生活實態를 중심으로』 일조각 pp.64-65
- 유양근(2012) 「<GO>, <피와 뼈>, <박치기>의 변주와 수렴」 『일본학연구』 36 단국대학교 일본연구소 pp.133-154
- 임운주(2009) 「그레마스 기호학적 접근을 통한 애니메이션 캐릭터 분석: 장편 애니메이션 슈렉을 중심으로」 『한국콘텐츠학회논문지』 9(5) 한국콘텐츠학회 pp.99-106
- 조현욱(1999) 「북한의 제일 조총련에 관한 연구」 경기대학교 통일안보대학원 석사학위논문 pp.16-20
- 주혜정(2014) 「최양일 영화에 나타난 제일코리아 표상: <달은 어디에 떠있는가> 와 <피와 뼈>를 중심으로」 『일어일문학연구』 91(2) 한국일어일문학회 pp.487-503

要 旨

After the war, the appearance of leftish Japanese (Jai-nichi) movie directors and their active working with expiating on suppression of Korean lead making a lot of movies which showed remorse of dominating Korea and represented negative view to the rounding-up of discrimination. But Japanese tend to evaluate those movies as reconstructing of minority in Japanese society.

We should understand those movies with different point of view. The appearance of Jai-nich was built on close relationship with social and historical circumstances at that time so it's certain to come at it from another angle.

In this study, the Korean-Japanese film <Blood and Bones> is analyzed in different angle with Japanese view. This movie showed a history of first generation of Jai-nichi through a life of one man (Jun-Pyeong Kim).

The Jai-nichi narratives in movies were regarded as a mirror of a Japanese society in transition towards becoming a multiracial country; a fact which post-war Japanese society strove to ignore and eliminate. The presence of a Jai-nichi identity in film, which emerged from the Japanese occupation of Korea represented a unique viewpoint. This study took a skeptical look at this interpretation, and analyzed the protagonist, Jun-Pyeong Kim's brutality in historical and social perspective.

The movie was separated to seven major sequences and analyzed to understand a structure and development of narrative. Greimas' semiotic square model was used to grasp a diverse meaning of the narrative structure. The character's acts were analyzed in social and political context and a relationship between Jun-Pyeon Kim and 3 other women became known as an important clue of analyzing Kim's drastic brutality. So the study tried to find the origin of brutality applying that relationship into Greima's actor model and Semiotic Square.

This study concludes that the brutality of the protagonist, Jun-Pyeong Kim in the film 『Blood and Bones』 came from Japan's colonial rule of Korea. In other words, Kim's several violent behaviors were symbolic of Jai-nichi who lived in the period of unstable and sudden changed imperialism of Japan and it was disclosed through this movie.

キーワード : Japanese Film, Blood and Bones, Jainichi, Choi yang-il,
Yang seok-il. Korean Japanese

투 고 일 : 2015. 2. 28
심 사 일 : 2015. 3. 14
게재확정일 : 2015. 4. 4